

顧客への媒体レス出荷に関する一考察

5 Q-4

今村 努 桐ヶ谷剛弘

富士通株式会社

1. はじめに

構内交換機(PBX)ソフトウェアの出荷は、企業内情報通信ネットワークの構築需要増大に伴い日増しに増加しており、出荷ファイル作成ミス、媒体不良、顧客への輸送上のトラブルなどが無視できなくなってきた。

本稿は、媒体を使用せずに出荷ファイルを作成し、公衆回線を利用して直接顧客システムに転送する「媒体レス出荷」に関して考察したものである。

2. 現状の出荷形態

現状のPBXソフトウェアの出荷は、営業オーダに従い顧客専用で作成したファイル(そのまま顧客のシステムへローディングして動くもの)を出荷している。これは、PBXのソフトウェアは顧客のニーズに合わせたサービスが多種多様であり、現場で全サービスを個々にインストールしていたのでは、作業が複雑で間違えやすいためである。

3. 新しい出荷形態

受注システム、製品手配システムなどの社内オーダエントリーシステムと連携し、媒体を使用せずに出荷ファイルを作成することが考えられる。

この流れを図-1に示す。

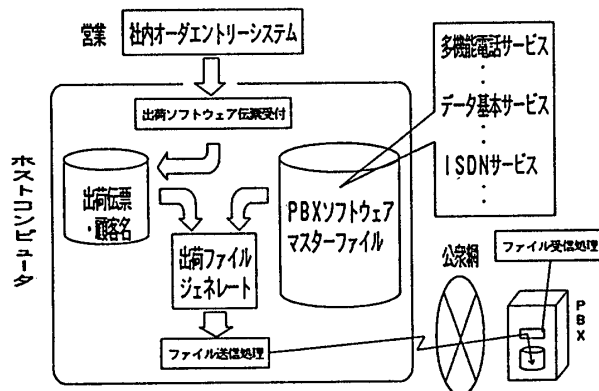


図-1 顧客への新出荷形態

ホストコンピュータは、営業など関連部門のオーダエントリーシステムから提供される出荷伝票から、顧客名、購入サービス、システム規模に応じたサービス容量などの情報を抽出し、管理する。

また、全サービスを含むPBXソフトウェアマスターファイルと出荷ファイルジェネレートシステムが格

納されている。

顧客名などのキー情報を入力すれば出荷ファイルジェネレートシステムが出荷伝票情報をもとにして、マスターファイルから顧客用のファイルを作成する。

4. 公衆回線を利用した出荷ファイル転送

4.1 PBXソフトウェアの分析

転送するにあたって転送量を分析した結果、プログラム単位でみて、全て同一データであるもの(例えばシステム固有データ、局可変データ収容エリアなど)がソフトウェア全体量の6割を占める。この割合は、顧客システムの回線数が多い場合さらに増加する傾向にある。

4.2 圧縮機構

交換機内に受信プログラムを格納したROMが実装されており、受信データを交換機のハードディスクに書き込む機能を果たす。圧縮機構により、転送時間が短縮される。圧縮機構を図-2に示す。

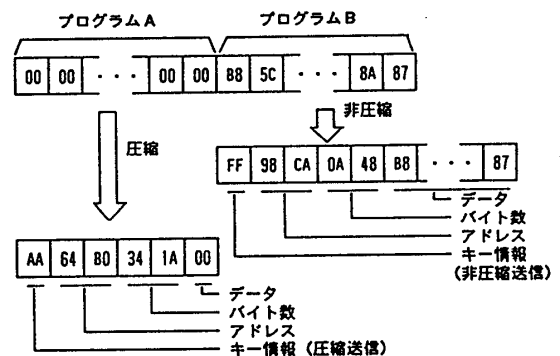


図-2 圧縮機構

圧縮機構を使用することにより、現実的な転送時間が実現できる。転送時間を表-1に示す。

表-1 転送時間

転送量(バイト)		普通(6M)	圧縮(2.5M)
データビット長	8	85分	35分
伝送速度(bps)	9600		

5. おわりに

以上のように、出荷ファイルを媒体を使用せずに出荷することで、ファイル作成上のトラブル、媒体不良のトラブル、輸送上のトラブルが解消でき、ソフトウェアの出荷に関する費用の低減、品質向上がはかれる。